

オソレミヨ

井上晃輔（熊本大学）

今日はゴミの日

だったと覚える

しかし見送り 布団にもぐる 雨だし

むし暑さの奥地に 聞こえてきた

なり響くもの それを 天満宮のお隣の

この団地の住人の多くの お年寄りが

道真公は未だやりきれんのだろう

と説明する

が

そう説明するお年寄りたちの 目玉が

ぐしぐし 潰れていく

迷信というには かるく

嘘というには 根深くて

流石にベランダの吸い殻くらい片付けておくべき

だったかな と俺は起き上がる明日は 土曜だし

YouTubeの自動再生が イタリアの歌かけてたし

オソレミヨ、オソレミヨ

このカーテンは母が

やっと見つけた

この窓枠に合う規格

オソレミヨ、オソレミヨ

その車輪は三階の俺に

やっとハブを覗かせ

団地の路地を転がっていた

さあ俺はみた、

大車輪は木製だ、

その木製の大車輪が、転がる路地は、

明らかな計画のもとに作られているんだろう、

歩きながらいつもそう思っていた、

路地を、

大車輪は転がって、

けつきよく、森と林の違いがわからないまま義務教育終わっちゃった、とわらった工場勤務の女の子とか、

どうやら、父が不幸せなのはあながち僕だけのせいでもないらしい、と気づいた受験期間近の男の子とか、

ふと、便りがなければ頼りもないという詩句を思いついてしかし、そのまま胸にしまい込んだ深夜レジ打ちのおっちゃんとか、

そろそろさすがにこの人生、なにかが巡ってもいいはずだ、いいはずだ、いいはずだ、と繰り返すひととか、それら

それらのひとびとの足跡を、路地を転がる大車輪が、彼らのひいた途切れそうな線と、計画された路地を、掠めるような線を、木製の大車輪が、

踏み潰すところ、

塗り潰すところ、

無視するところを、俺はみた、

ベランダからみた、今宵みた、

ちよつと寒がりながら、みた、

踏み潰されてた、

きつとみた、

みたんだ

俺は

自転車に乗れる　ようになるのに人より
時間がかかった　父は　諦めるのが早い
んだあんたはと言うが　俺が諦めるより
父が俺を諦める方が早かった　と今では
思う

俺は

自分が漕いでいる自転車の車輪を見よう
としていつも　バランスを崩すのだった
車輪を覗きたがるのは　俺の生来の悪癖
で　父の運転する車の車輪も　窓を開け
て覗きたがるものだから　助手席の母は
俺の隣の　後部座席に移動せざるを得な
かった　それを申し訳なく思う　今では
思う

俺が

当時に　思っていたのは　リアガラスに
映る　太陽が　俺たちを　俺たちの車を
追いかけてるように見えた　ってこと　だ

月が　出た

この宵　今宵

転がっていた　大車輪

その上に乗ってたのは

元右大臣　菅原道真　だったかもしれないし
一輪車さえ乗りこなした　うちの妹　かもね
今度は俺が　車輪に覗かれる番だって
思いつく前に　車輪は通り過ぎてった
隣の部屋の

ぐしぐし目玉のお年寄りに　あくるひ